

「二」次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

まず、「リーダーシップ」とはそもそも何でしょうか？

リーダーシップに関する研究はさまざまに行われていますが、そこでなされている定義の①最大公約数的なものは、「何らかの成果を生み出すために、他者に影響を与えること」です。

そして実は、従来からある権限によるリーダーシップにおいても、新しい権限によらないリーダーシップにおいても、この定義はほぼ変わりません。どちらもリーダーシップと見なされる行動には、手に入れたい、あるいは実現したい「成果（成果目標）」があり、その達成のために、まわりを巻き込んだり、頼んだりといった「影響」を与えたいという2つの要素が欠かせません。「成果目標」と「まわりへの影響」の二つの要素があつてはじめて、いずれのリーダーシップも成り立つのです。

そうした定義に立つと、②人類がグループ行動を始めた時点ですでにリーダーシップは生じていたと考えられます。たとえば、狩猟採集の時代に、大きな獲物を仕留める場合、ひとりでは難しいため、グループを形成することも多かったと思います。そこでは「獲物を仕留める」という成果目標に向かって、参加するメンバーが協力（影響）し合うということが行われたことでしょう。そうした状態にあるとき、このグループにはリーダーシップが働いていたといえます。

このように、従来からのリーダーシップも新しいリーダーシップも、「定義」においてはほぼ同じです。ただ、グループに参加するメンバーの「誰」がリーダーシップを発揮するかでグループの状態は大きく異なります。従来のものは一握りの「権限のある人（たち）」です。一方、新しいものは、「権限の有無にかかわらず、参加する人全員」です。「権限」とは、辞書によれば「ある範囲のことに正当に行うことができるものとして与えられている能力」です。ここで大切なのは「正当に」ということと、「与えられている」ことです。ある人に対して「やってよらしい（正当）」と誰か上位の人や組織が承認しているということなのです。

人類の歴史においては長い間、前者のリーダーシップが主流であったようです。これは、人間の社会を考えれば、自然なことだと思います。なぜなら、何らかの「成果」を達成するために、まわりの他者に影響を与え、動かしていくことは、簡単なことではないからです。

あなた自身の身に置き換えてみれば、③それは理解しやすいと思います。（A）、学校で新しいクラブを立ち上げたいなど、あなたが今、実現したいことがあるとします（実際に頭に思い浮かべてみてみましょう）。しかし、それは自分ひとりの力では叶えられそうもなく、一緒に取り組んでくれる人が数人必要だとしましょう。となると、まわりの人たちを誘って、巻き込んでいか

なければいけません。

さて、そうした行動はあなたにとって、簡単ですか？ おそらく、多くの人にとって、「なんだか難しそうだな」とか、「ハードルが高そう」という感じなのではないでしょうか。

実際に、「目標達成のために、まわりの人に動いてもらう」ということは容易ではありません。人は、簡単には他人のために動かないものです。だからこそ、動いてもらうための「何か」が必要になります。「お金を支払う」、「あなた自身の魅力で」、「腕力にモノを言わせて」……などなど、いろいろな方法がありますが、なんととっても効果抜群なのが、人が従わざるを得ない何らかの根拠に裏付けされた「権限」を持つことです。

そうした権限を持つことができれば、まわりに命令を出し、こちらの意図通りに動いてもらい、実現したいことに近づいていくことが可能となります。人を動かしていくのにこれほど手っ取り早い方法はありません。

また、成果目標が大きければ大きいほど、その実現には多くの人の手が必要になるでしょう。グループも大きくなりがちです。大きなグループを権限によって動かしていくためには、それだけ権限も強力でなければなりません。

前述したように「権限」にはそれを裏付ける、つまり、「この人（たち）には、私たちを従わせる力がある」とまわりに納得させる「根拠」が必要です。それがないと、「なんで、この人（たち）の言うことをきかないといけないの？」と言われてしまいます。

(イ)

権限を裏付ける根拠は、時代や場所、コミュニティ等によってさまざまです。神という存在が身近だった時代は、「神から選ばれたから」が根拠になり得ましたし、近代になってからは多くの国において、「Xな選挙で選ばれたから」が政治家たちの持つ

権限の根拠となっています。その他、学校生活でいえば、たとえば生徒会長は「選挙で選ばれた」が権限の根拠になります。一方、部活動などでは「競技での実力」もありますが、多くの場合、年齢や学年が権限の根拠になりがちです。また、会社組織等では、仕事での実績・キャリアなどが権限の根拠になりやすいといえます。他に、あまり良いことではありませんが、暴力や脅しが根拠になるという場合もあります。(ロ)

いずれにしても、まわりが認める（認めざるを得ない）権限を持っている（あるいは、与えられている）からこそ、成果目標に向けてまわりに影響を与え、グループを動かしていくことができるのが、④従来のタイプのリーダーシップなのです。

ただし、権限があるからといって、誰もがスムーズに従ってくれるわけではありません。それは、世界の歴史を紐解けば明らかです。ひとたびリーダーとなっても、部下の裏切りや、人々からの抵抗などでその座を引きずり下ろされた人たちの例は枚挙にいとま

がありません。(八)

それは昔なら、王や領主などの一族に代々伝わる「帝王学」のようなものだっただろうし、現代においても「リーダーシップ」をテーマにしている本の中に散見されるグループを引っ張っていくための資質や考え方、態度、スキルなどに当たるでしょう。

また、この場合の、人を動かしていくための「何か」において主となるのは、「良い『命令』の出し方」です。

「権限によるリーダーシップ」にもさまざまなタイプがありますが、原則、支配的な立場に立つ「リーダー(たち)」は、人々に「命令」を出し、動かしていきます。

その際、重要なのは、出した命令に従わせることです。そのために、人々の恐怖心を煽る、たとえば暴力や脅しなどを用いるのも、良し悪しは別として、ひとつの方法であるのは確かです。実際、人類の歴史の中には、こうした暴力や脅しによるリーダーシップの事例はたくさんあります。(九)

ただ、こうしたやり方は短期的にはうまくいっても、長期的にはたいてい崩壊に至ることを歴史も教えてくれます。それゆえに、命令を出すにあたって、暴力や脅しを使わず、よりスマートにスムーズに従ってもらうための方法を模索することが、長い間、リーダーシップにおいて重要視されてきました。

たとえば、無理やりではなく納得して命令に従ってもらうにはどうすればいいのか。さらには、「ぜひ、私も参加させてください」と自発的に参加してもらうにはどうしたらいいのか……などなど。それぞれの時代で、さまざまな識者が「良い『命令』の出し方」を唱え、それをリーダーの立場に立つ一握りの人々たちに向けて助言する、ということが脈々と続けられてきたのです。

ただし、その文脈で議論されてきたのは、やはりあくまでも「権限によるリーダーシップ」です。上位者に任命されたあるいは選挙で選ばれた、一握りの権限を持つ一握りの人々たちのための、「良い『命令』の出し方」がリーダーシップで議論されることのものでした。こうした状況は20世紀後半まで続きます。

(B)、ここ20年、30年の間に状況が大きく揺らいできています。

この従来型のリーダーシップだけに頼ってはいけません、物事がスムーズに進んでいかないとどこか、そのグループにとって致命的な事態をもたらしかねなくなってきました。

その大きな要因は、プロログでも述べましたが、世界規模で「変化」のスピードが速くなっていることが挙げられるでしょう。誰も予想しなかったような出来事が突然起こり、その結果、世界が百八十度ガラリと変わってしまうというような事態が、1980年代ごろから、世界の至るところで見られるようになったのです。

1989年のベルリンの壁崩壊と東西冷戦の終結しかり、1990年代に入り、インターネットの商用目的での使用が広がり、世

界の人々のライフスタイルが一変したことしかり、昨今のグローバル化の進展で地理的、文化的、心理的などさまざまな面で世界の距離が縮まってきたことしかり。

こうした変化のスピードが速く予測もしがたい時代において、グループが何らかの目標を達成していくには、変化を敏感に感じ取り、それに対してスピーディーに対応していくことが求められます。ところが、従来型のリーダーシップでは、頂上にいる「リーダー」が一人だけであるためにさまざまな種類の変化に対応していくことが難しくなってしまうがちなのです。

たとえば、グループ内にいるメンバーの誰かがその変化に気づき、それに対応するための方法を提案しても、その人に権限がなければなかなか実現しません。権限を持つリーダーが聞く耳を持たないタイプであれば、そのまま⑤お蔵入りにもなりかねません。そうならば、そのグループは、今起こっている変化にまったく対応できなくなってしまいます。

リーダーが変化に敏感な人（たち）であれば、まだそのグループは救われますが、そうでなければ、うまく変化に対応できず、場合によってはそのグループにとって致命的な事態をもたらすこともあり得るのです。

ここまで、従来型のリーダーシップの代表として権限によるリーダーシップのことを説明してきましたが、上位者に任命されたり選挙で選ばれたのではなく、また暴力や脅しでもないのに、権限があるかのようにみなして、人々がフォロウするリーダーがいます。それがカリスマ型リーダーと呼ばれるもので、周囲が「この人には人を引っ張る特別な資質がある」と思うような人です。宗教団体を率いる人にも見られますが、そうでない普通の組織でも、特に危機的な状況で急に出現することがあります。このタイプのリーダーシップはその人だけの資質にその根拠があると周囲も認めているので、後継者を育成したり、あるいは教育によって大量に育成するといったことが難しいという欠点があります。

⑥こうした時代の流れの中で登場したのが、【中略】「権限によらないリーダーシップ」です。つまり、従来型のように特定の人権限のあるリーダーとなって、グループを引っ張っていくのではなく、そこに参加する一人ひとりが、権限を持たないままリーダーシップを発揮していくという形です。

従って、チームを引っ張っていく人はつねに同じではなく、「このときはAさん、このときはBさん」という具合に交代していきます。つまり、リーダーがYに代わっていくのです。

となると、そこに参加するメンバーは誰もがリーダーシップを発揮する機会があるわけですから、自ずとそこでの行動は自律的・主体的なものになります。グループが掲げる目標を達成するために、自分には何ができるかを自覚し、実際に行動していく。単に命令に従って行動するのではなく、積極的にそのグループに関わり、目標達成に必要なかを自律的・主体的に考え、動いていくので

問五 X・ Y に入る語を次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。記号は一度しか使えません。

ア 民主的 イ 意識的 ウ 破壊的 エ 流動的 オ 合理的

問六 傍線部④「従来のタイプのリーダーシップ」を發揮する上で重要なスキルは何か。これより後の文中から十字でさがし、抜き出しなさい。

問七 傍線部⑤「お蔵入り」と異なる意味の言葉が一つある。次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 暗礁に乗り上げる イ 事も無げ ウ 白紙に戻る エ 企画倒れ オ 日の目を見ない

問八 傍線部⑥「こうした時代の流れの中で登場したのが、【中略】『権限によらないリーダーシップ』です」とあるが、「権限によらないリーダーシップ」が登場したのはどのような時代か。それを表す語句を文中から二十字以内でさがし、抜き出しなさい。

問九 次の(1)～(4)のうち、本文の内容に合うものは○、そうでないものは×で答えなさい。

(1) 従来からあるリーダーシップと新しいリーダーシップの定義は、時代や場所、コミュニティ等によって大きく異なる。

(2) 従来型リーダーシップのうち、暴力や脅しを権限の根拠とするリーダーシップが最も強力で効果的である。

(3) 「カリスマ型リーダー」は危機的な状況でもリーダーシップを發揮し、後継者を教育し育成する能力にも長けている。

(4) 新しいリーダーシップでは、権限を持たない一人ひとりが自律的・主体的に行動することで変化にも対応できる。

問十 次の一文は文中のどこに入れたらよいか。適当な箇所を文中の(イ)～(ニ)から選び、記号で答えなさい。

それゆえに、従来型の「権限によるリーダーシップ」においても、まわりの人たちをうまく動かしていくためには、権限だけだけでなく、それにプラスした「何か」も必要となります。

「三」次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

カンダさんと初めて会ったのは、四年生の三学期、雪の積もった日曜日だった。

少年は朝ごはんもそこそこに近所の公園に出かけて、友だちと一緒に雪だるまをつくって遊んでいた。雪だるまのおながができあがった頃、久美子ねえちゃんが公園の横を通りかかった。

「ヨウくん、寒くない？」

ご機嫌な声で久美子ねえちゃんは言った。

「どこか遊びに行くの？」と少年が訊くと、「駅まで友だちを迎えに行くの」と笑って答え、待ち合わせまでまだ時間があるのだろうか、公園の中に入ってきた。

「友だちって、会社のひと？」

久美子ねえちゃんと同じ会社の「友だち」なら、何人か知っている。若い女のひとばかりだ。一度、みんなでお花見に出かけたときに、「ヨウくんもおいでよ」と連れて行ってもらった。久美子ねえちゃんは少年を「わたしのカレシ」と紹介して、少年が頬を真っ赤にすると、みんなはおかしそうに笑った。

「うーんとねえ、ちよつと違うかな。会社も違うし、『友だち』っていうのじゃないかな、やっぱり」

久美子ねえちゃんは①くすぐったそうに肩をすくめ、ほんの少し照れくさそうな顔になった。それでピンと来た。だから逆に、当たっていてほしくないと思いつつ、「カレシ？」と訊いてみた。

「やだあ」と久美子ねえちゃんは笑った。「ヨウくん、そんな言葉まだ覚えなくていいの」と少年の肩を軽くぶつ真似をして、「じやあね」と公園を出て行った。「違う」とは言わなかった。それが答えだった。正解してもあまりうれしくない②クイズもあるんだと、少年はそのとき初めて知った。

【中略】

春になると、カンダさんは日曜日のたびに久美子ねえちゃんの家遊びに来た。もう※結納の日取りを決めるところまで進んでいるんだと、母から聞いた。

少年とカンダさんもどんどん仲良くなった。久美子ねえちゃんの家を訪ねるときには、カンダさんは必ず少年とも遊んでくれた。「ヨウくんのこと、大好きなんだって」久美子ねえちゃんが教えてくれた。「もともと子どもが好きだし、ヨウくと遊んでると田

舎にいる弟のことも思いだすんだって」

カンダさんは、スポーツはあまり得意ではなかった。キャッチボールをやってもサッカーをやっても、同級生の友だちのほうがつつまい。そのかわり、プラモデル作りを手伝ってもらうときには、少年はいつも目を大きく開いてカンダさんの指先を見つめた。少年が作るとどうしても接着剤がはみ出してしまう細かい部分も、カンダさんは魔法か手品のようによく仕上げてくれる。プラモデル作りに夢中になってしまい、久美子ねえちゃんが「なにやってるの？ もうごはんできて、みんな待ってるのよ」と迎えに来ることもしよっちゅうだった。そんなときにはいつも、カンダさんは少年に目配せして、いけねっ、と肩をすくめる。部屋を出るときにも、また今度な、と笑う。その「また今度」が、同じ日だったこともある。おじさんとお酒を飲んだあと、帰りに少年の家に寄って「レーダーのところは難しいから、俺がやっというてやるよ」と作りかけの軍艦のプラモデルを箱から取り出し、一緒にいた久美子ねえちゃんが「用事があるから早く帰るって、このことだったの？」とあきれかえると、えへへっ、といたずらっぽく笑う。

カンダさんは、③そういうひとだった。

そして、そういうひとは、おとなの世界ではあまりほめられないんだということを、五年生になった少年はうっすらと察していた。

「どうもねえ、おとなと会うより子どもと会ってるほうが楽しそうだなってねえ……いくらいいひとだっていっても、あれじゃあちよつとねえ……」

母は（A）をついていた。

「久美子ちゃんもアレだな、だいじょうぶなのかなあ、どうも頼りないからなあ」

父もなんとなくカンダさんのことを気に入らない様子で、それはきつと、久美子ねえちゃんの両親も同じなのだろう。

でも、少年にとつては、久美子ねえちゃんが歳の離れたお姉さんなら、カンダさんは歳の離れたお兄さんだった。大好きなお兄さんができた。それだけで、よかった。

五月の連休中に、久美子ねえちゃんに「明日、動物園に行くんだけど、ヨウくんも一緒に行かない？」と誘われた。

「カンダさんもいるの？」

「彼が言ったの、ヨウくんも誘おうって」

少年は、やったあ、と跳び上がって喜んだが、④両親はいい顔をしなかった。「ほんとに久美子ちゃんがそう言ったんだな」と父

は何度も念を押し、母はもつとしつこく「ほかになにか言っていなかった？ それだけだった？」と訊いてきた。

「行っていいでしょ？」

両親は顔を見合わせ、父が黙ってうなずくと、母もやつと「いいわよ、二人の邪魔しないようにね」と言った。動物園は楽しかった。

カンダさんも久美子ねえちゃんも、にこにこ笑って、動物の檻をひとつずつゆくりと時間をかけて巡っていった。途中で手をつないだ。右手をカンダさんと、左手を久美子ねえちゃんと――五年生になってからは両親と手をつなぐことは一度もなかったが、カンダさんと久美子ねえちゃんとなら手をつないでも恥ずかしくなかった。

帰りの電車も、少年を真ん中にして三人並んで座った。電車の揺れに身を任せているうちに、少年はうたた寝をしてしまった。夢の中でカンダさんと久美子ねえちゃんの話し声が聞こえた。久美子ねえちゃんは怒った声で……違う、涙ぐんだ声でなにか言っていた。カンダさんの言葉は聞き取れなかったが、声の調子で、謝ったり言い訳をしたりしているんだ、と感じた。どうしたの？と訊きたかったが、訊いてはいけないんだ、とも思った。そう思ったのも、夢の中のことだっただろうか。

「ヨウくん、次降りるよ、駅だよ」と揺り起こされた。

久美子ねえちゃんは泣いていなかった。涙の名残もない。だが、少年の隣には、カンダさんではなく知らないおばさんが座っていた。

「カンダさんは？」

「帰った。途中だったの、降りる駅」

「……起こしてくれたらよかったのに」

幼い子どもがすねるように言うと、久美子ねえちゃんは「ごめんね」と笑った。泣き顔のような笑顔だった。

「でも……いいや、どうせ来週また会えるもんね」と少年は言った。⑤おそるおそる、にならないように気をつけて。久美子ねえちゃんはさつきと同じ顔で笑うだけで、なにも応えてはくれなかった。

連休が明けると、カンダさんが姿を見せない日曜日が増えてきた。カンダさんが帰ったあとの隣の家からおじさんと久美子ねえちゃんが言い争う声が聞こえてくるようにもなったし、隣のおばさんが夜中にわが家を訪ねて両親と長い時間話し込むこともあった。

それでも、カンダさんは、隣の家を訪ねたときには必ず少年の家にも寄った。父は居間にこもったままで、母もお茶を出さない。(B) 空気の中、カンダさんは少年の部屋に入るとほっとしたように肩の力を抜いて、「プラモ、どこまで進んだ？」と笑う。少年は作りかけのプラモデルを箱から出して、「ここまで」と言う。言葉を交わすのは、それだけだった。

カンダさんは黙々とプラモデルを作りつづけた。最初は難しいところを手伝うだけのはずだったのに、少年には手出しさせず、話しかけてもこないで、一心に指を動かして軍艦や戦車を作りつづけた。

久美子ねえちゃんは、もう、カンダさんを迎えには来なかった。

結婚の話がこわれた。

カンダさんの実家が反対したせいだ、と少年は両親から聞いた。

カンダさんの実家は東京から遠く離れた町で商売を営んでいて、長男のカンダさんはいずれは帰郷して家業を継ぐ——プロポーズしたときには「家のほうは弟に任せるから」と言っていたのに、実家の猛反対と説得を受けて、決心が揺らいだ。久美子ねえちゃんはいまの仕事を辞めるつもりも東京から離れるつもりもなかった。板挟みになったカンダさんは、(C) な態度をとりつづけ、結論を先延ばしにしたすえに、結局、久美子ねえちゃんではなく実家のほうを選んだ。

「もう遊びに来ないの？」

少年が訊くと、母は「あたりまえでしょ、顔なんて出せないわよ」と吐き捨てるように言った。「あんただって⑥そう思うでしょう？ 久美子ちゃんは裏切られたのよ、あの男に、そんなの許せないでしょう？」

梅雨入りして間もない頃——金曜日から降りつづいていた雨がようやくあがった日曜日の夕方、友だちの家で遊んできた少年が帰り道に公園の脇を通りかかったら、背広姿のカンダさんがいた。

いつものように「おっす」と照れくさそうに挨拶したカンダさんは、「ここで待ってたら会えるんじゃないかって」と笑った。

少年は笑い返さない。頬をIこわばらせたまま、カンダさんから顔をそむけて、「おねえちゃんちに行ったの？」と訊いた。

「行っただけど、会えなかった。ヨウくんの家にも寄っただけど、おばさんに怒られちゃったよ」

「……ふうん」

「もう来ないと思うんだ、ここには。だからヨウくんは、さよならって言いたくて」

少年は公園の植え込みのアジサイをじっと、にらむように見つめる。

「いままでありがとう」

カンダさんの差し出す右手が視界の隅をちらりとよぎったが、少年は顔を向けず、バイバイ、と口を小さく動かすだけだった。カンダさんもすぐに手をひっこめて、「プラモ、どこまで進んだ？」と訊いた。

「壊した」

少年はⅡそっけなく言って、頭の中でアジサイの花びらの数をかぞえていった。

カンダさんは黙って公園を出て行った。

花びらを三十まで数えたところで、少年はその場にしゃがみ込み、雨で濡れた地面を手で搔いて、泥玉をつくった。

⑦カンダさんの背中めがけて、泥玉を放った。

当たらなかつた。泥玉はカンダさんの足元ではじけてしまった。

振り向いたカンダさんは怒らなかつた。そのかわり、雪合戦のときのように逃げてもくれなかつた。じゃあな、と笑って、また歩きだして、ほどなく背中では夕闇に消えた。

久美子ねえちゃんは、二年後に別の男のひとと結婚をした。今度のひとはおじさんやおばさんにすぐに気に入られて、少年の両親も「久美子ちゃんもこれで幸せになれるよ」と喜んでいた。でも、そのひとは、少年の歳の離れたお兄さんにはならなかつた。少年はもう中学生で、久美子ねえちゃんに会っても、「こんにちは」しか言わなくなっていた。

結婚式の前の日に、久美子ねえちゃんがお別れの挨拶に来た。お祝いのケーキを用意していた両親は、久美子ねえちゃんを居間に通して昔ばなしを始めたが、少年は最初に玄関先で挨拶をしただけで、あとはずっと自分の部屋にこもっていた。

本棚に、小学生の頃に作ったプラモデルがいくつも飾ってある。そのうちのひとつ——カンダさんに手伝ってもらった戦艦を本棚から下ろした。小学五年生の頃には魔法のように美しく思えた仕上がりは、あらためてじっくり見つめると、接着剤が意外と外にはみ出していて、たいしたことはなかつた。

玄関のほうから話し声が聞こえた。母に「久美子ちゃん、帰っちゃうわよお」と呼ばれたが、⑧聞こえなかつたふりをして、戦艦のプラモデルを見つめつづけた。

お兄さんになりそこねたひとのことを、ひさしぶりに思い出した。きつと、あのひとも久美子ねえちゃんの結婚を喜んでくれているだろう——ふふっと笑うカンダさんの顔がくつきりと浮かんだ。

少年は戦艦を手にとって、持ち上げた。大砲はついていてもきつと敵にはからきし弱いはずの戦艦は、虚空の大海原をのんびり

と、頼りなく進んでいった。

―重松清「小学五年生」による―

(注) ※結納：婚約したことのしるしに、互いに金品を取り交わすこと。

問一 傍線部①「くすぐったそうに肩をすくめ、顔になった」とあるが、このときの久美子の心情を次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 少年にカレシに会いに行くことを見抜かれて恥ずかしい気持ちになっている。
- イ これからカレシを迎えに行くことを少年にどう正確に伝えるべきか困っている。
- ウ 迎えに行くのは友だちではなくカレシであるため、きまりが悪く感じている。
- エ 少年と遊ぶ約束を破ってまでしてカレシに会いに行くので、後ろめたく思っている。

問二 傍線部②「クイズ」とあるが、ここではどのようなクイズか。適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 正解を言い当てると、自分の立場が悪くなるクイズ。
- イ 当たったところで自分には何の得にも損にもならないクイズ。
- ウ 当たってしまうと自分が気恥ずかしくなるようなクイズ。
- エ 不正解であることが自分にとっては都合が悪くないクイズ。

問三 傍線部③「そういうひとだった」とあるが、どういうことか。適当ではないものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 大人というより子供と遊んでいるときの方が生き生きとしている人。
- イ 婚約相手というよりもプラモデルを作ることの方が好きな風変わりな人。
- ウ いくらいい人でも自分が結婚する相手の両親から気に入られない人。
- エ 好きなことに夢中になるとそのことばかりに気持ちが入ってしまう人。

問四 文中の(A)に入る語を次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 悪態 イ 頬づえ ウ ため息 エ 愛想

問五 傍線部④「両親はいい顔をしなかった」とあるが、それはなぜか。その理由を本文の内容をふまえて四十字以上、五十字以内で説明しなさい。

問六 傍線部⑤「おそろおそろ、にならないように気をつけて」とあるが、このときの少年の心情として適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア カンダさんが先に帰ったことで久美子が不機嫌になっているので、なるべく関わりたくない。
イ カンダさんと言い合いをしていた久美子が泣いていたので、その理由が知りたい。
ウ 久美子がカンダさんともう結婚する気がないという話を、今は聞きたくない。
エ 久美子がカンダさんともめていたことに、実は気づいていることを感づかれたくない。

問七 文中の(B)(C)に入る言葉として適当なものを次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

- (B) ア 厳かな イ しんみりとした ウ ぼんやりした エ 冷やかな
(C) ア 優柔不断 イ 一心不乱 ウ 有名無実 エ 面従腹背

問八 傍線部⑥「そう思う」とあるが、だれがどう思うのか。本文の内容に即して簡潔に説明しなさい。

問九 二重傍線部Ⅰ・Ⅱの語の意味を次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

- I 「こわばらせる」
ア 緊張して体などが硬くなってしまふこと。 イ 怒りやいらだちで相手を威嚇すること。
ウ 気分が悪く、血の気がなくなること。 エ 関心がなく、無表情になること。

II 「そっけない」

- ア あっさりとしていて屈託がない様子。
イ 思いやりや温かみがない様子。
ウ 批判的で手厳しい様子。
エ 正直だが、気遣いのない様子。

問十 傍線部⑦「カンダさんの背中めがけて、泥玉を放った」とあるが、少年がこのような行動を取ったのはなぜか。このときの少年の心情として適当なものを次の中から二つ選び、記号で答えなさい。

- ア 不愉快 イ 寂しさ ウ 苦しみ エ 無関心 オ わだかまり

問十一 傍線部⑧「聞こえなかったふりをして、戦艦のプラモデルを見つめつづけた」とあるが、このときの少年の様子として適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 中学生になった少年にとって久美子はもう過去の人で無関係であり、いまさら親しく話せるような話題もないので、自分の部屋に閉じこもってプラモデルを眺めながらやり過ぎそうとしている。
イ 少年のころと今とでは久美子に対する思いも異なり、気安く接することはできないが、その久美子の訪問をきっかけにして一緒にプラモデルを作ったカンダさんのことを思い出している。
ウ 兄のように大好きだったカンダさんと結婚しなかった久美子のこと、今も許すことができず、久しぶりの久美子との再会にも快く応じる気持ちにはなれないので、聞こえないふりをしている。
エ カンダさんだけではなく、久美子までが自分から離れていくことに寂しさを感じ、久美子の最後の来訪にも素直に応じる気にはなれず、プラモデルを見続けることで自分の気持ちを慰めようとしている。